

中國文學

第七十三號

六月



中國文學研究會編輯

昭和十一年八月五日第三種郵便物認可
昭和十六年五月廿八日印刷納本(每月一回一日發行)

昭和十六年六月一日發行

生活社發行

「西太后に侍して」の著者

田中克己

一昨年だつたと思ふが、書店で陳貽先・陳冷汰二氏の譯(實は抄譯)になる徳菱公主著「清宮二年記」といふ書を探して来て、繙讀したところ大變面白かつた。この譯書の序文に原書を“Two Years in the Forbidden City”といふことを知り、帝大の圖書館まで出かけて探した。Princess Der Ling で検索した時には出て来なかつたが、書名の方で検索すると出て來、著者は Mrs. White といふ名であることを怪訝に思つたが、譯書に著者がその後米人に嫁いだことを記してゐるのを思ひ出して合點した。

私の著者に關する知識はその後いくらか増してゐるが、今度竹内好氏の勧めによつて中國文學叢書の一冊に、太田七郎氏と私の譯を加へてもらふことになつたのを機として博雅の士の御教示を賜りたいと思ふ。

著者の父を裕庚といつたことは、この書に記してゐるそ

(邦譯あり、生活社刊)の書目に見えてゐるが、それ以外に

“Imperial Insense”といふ書があつて一九三三年にニューヨークから出版されてゐることは、その支那譯が「御香縹緲錄」の題名の下に、秦瘦鷗氏の譯で民國二十五年に出てるから疑ひない。この譯書の巻首に著者に關する詳しい紹介が出てゐるから、これと“Two Years…”の序に出てゐることゝを綜合すると、著者の父裕庚は清の宗室で、白旗(正鑲)の何れかは不明)に屬し、公府であつた。駐日公使から駐佛公使に轉する間に、彼は一度總理衙門に入つた。郵政の改革にも功のあつた人で、また陸海軍の組織の近代化にも盡力したが失敗した。この彼の経歴と抱負は子女の教育方針にもあらはれて、當時としては珍らしく娘たちにミッション・スクールの教育を受けさせ、その後フランスにも隨へて行つて修道院に入れて教育を畢へさせたのであつた。

ところで、著者の父のことは暫く措きこゝで著者自身のことを問題にするなら、先づ第一にこの著者の名は漢字で何といふ字が正しいのであらうか。前述の陳氏等の「清宮二年記」には徳菱と記し、秦氏の「御香縹緲錄」では徳齡としてゐる。いづれも英文の Der Ling に相當するが、

の一八九五年(光緒二十一年、明治二十八年)に駐日公使となつたといふ経歴から間違ひがない。彼はその後一八九九年(光緒二十五年)に駐佛公使に轉じ、一九〇三年(光緒二十九年)に家族と共に歸國したが、記事はこゝから始まつてゐる。裕庚の駐日公使となる以前の経歴は廣東の惠潮嘉道、即ち廣東省東部の惠州、潮州、嘉應州方面を治める道臺であつたことが、清史稿卷二百十二交聘年表や清朝實錄光緒廿一年五月戊午の條などでわかるが、清史稿にも列傳をもたないし、著書や官歴やその家系などもこの著者の記事中に出て來る以上には知るべきがない。日清戦争直後に日本に赴任して相當期間駐在してゐたことであるから、日本に知人もあり、何かの記載もあるのではないかと思ふが、いま搜索の途を得なす。

この著者は中々筆の立つた人と見えて、他にも

Old Buddha (New York, 1928)

Kowtow (New York, 1929)

の二著があり、前者はこの著と同じく西太后の宮廷を記し、後者は自己の生立ちを記したものだといふことが、ラトローレット(K. S. Latourette)の「支那の歴史と文化」(The Chinese; Their History and Culture, 1934—38)

その何れによるべきかには迷はざるを得ない。尤も秦氏の書にはドー・リンの妹といふ容齡の序と跋があり、また兄なる助齡の名が見えてゐるから、殆ど徳齡に據るべきかと思ふ。“Two Years…”中には Roon Ling となつてゐるのが容齡の譯字であらう(「清宮二年記」では龍菱と充てらる)。

第二に不可解なのは英文で著者を Princess と稱し、陳氏はこれを公主、秦氏は郡主としてゐることである。周知の如く公主は支那の皇帝の女、もしくはそれに準ずる待遇の女皇族、郡主は親王の女もしくはそれに準ずるものである。公府の娘は西洋流にいへば Princess であるが、これを公主、もしくは郡主と譯することは間違ひである。たゞ秦氏の序文中に西太后が容齡に特に山壽郡主なる稱號を賜つたことを記し、姉なる著者も同じく郡主の稱號を賜つたことがこの書の終に見えてゐるからそれはそれとして、ここで再び問題としたのは、著者の父裕庚が公府であつたといふことの、實は疑はしいことである。

著者が度々それを云つてゐるのに對し、有力な反證として別がないが、前述の清史稿の個處にも公府であることを記さず、また宗室世系表にも輔國公もしくは鎮國公にして裕

庚なるものを見ない。宗室でないとしたら封爵世系表に見えてゐる筈であるが、それにもない。

しかも最近はじめ太田氏の注意で氣附いたのであるが「清朝野史大觀」卷八清人逸事に裕庚出身始末なる記載があつて、大意を記せば

「裕庚、字は朗西、本姓は徐で、漢軍正白旗の人である。父聯某は字を翰庭といふ、道光咸豐時代に江蘇の縣令に任じ、君子人であつた。子の裕庚の幼少より聰明で自ら恃む様を見て、將來却つて家聲を墮すだらうと云つたことがある。裕庚は屢々鄉試に落第して遂に州同の官につき、將軍勝保の軍に従つた。その軍狀を報ずるや縦横跌宕、讀むものをして驚かしめた。勝保の失脚後、歸省し、偶々父の死に會つたが、友人の廬州知府馮魯川の紹介によつて安徽巡撫喬勳の幕下に入り、章奏のことを掌り、喬が陝西巡撫に轉任すると、またこれに従ひ、その推薦によつて知府の官を授けられた。喬の退職後、安徽巡撫英果敏の幕僚となり權勢益々盛んで、同治十三年英が廣東總督に擢んでられるや、裕庚は道員を以て廣東に留り、事は大小となく彼の決するところとなつたので、當時「廣東に二總督あり」と云はれた。その後、朝廷の命を受けず專斷の事があつたといふので英・裕ともに免職となり、英は光緒三年烏魯木齊都統に復活したが、一年とならない中に死したので、裕は一時失意の境遇に陥つた。この時彼を李鴻章に推薦するものがあつて、天津に行き優遇を受けた。やがて李の腹心劉銘傳が臺灣巡撫に任ぜられたので、これに隨行し、知府の官を復するを得て湖北省に赴いた。

その悲鳴を聞兼ね、抗議したので、その後夫妻は少しく鋒を収めた。しかし奎齡の妻はその鞭傷のため死んだのである。」
といつて、彼の一家内の私事をくはしく述べて悪罵し、更に德齡たちの身の上にも記載が及んでゐる。

「この洋妓が裕庚のところへ来たとき羊哥といふ男兒をつれて来た。ついでまた裕の子供を一男二女まうけた。この女は英佛の語文に長じ、外國の音楽技藝に長けてゐた。二人の娘も長ずるとまた外國語が巧みで、引きによつて宮中に入つて通譯となり、西洋の貴婦人が西太后に謁する度に通譯し、勢ひ宮の内外を傾けた。たま／＼外國の女畫家が西太后の命で、油繪の肖像を描いた。甚だよく出来てゐたので太后は禮をしようとした。が、畫家は太后のために畫いたのを光榮として取らなかつた。間に立つた姉妹はそこでもまんと八萬兩を着服した。これが太后に聞えて二人は宮中から逐ひ出され、天津や上海にゆき、ダンス會をして西洋の巨商と往來した。

二人の男兒は助齡、馨齡といひ、助齡がすなはち羊哥である。みな官を買つて道員となつたが端方のために免職され、行方知らずになつた。裕庚が死ぬと洋妓は二女をつれて、久しく上海にゐたが、これも行方不明である。但し西洋人について歐洲に行つたといふものがある。」

これは清末第一のハイカラであつた裕庚の反對派の記載であるらしく、非常に惡罵の語にみちてゐて、にはかには信用出来ない。特に西洋人の女畫家、即ちこの書中のカール嬢のことに關する横領の件は誣告であらう。しかし、德

湖廣總督張之洞は一見してその奇才に驚き、省内の重官に歴任せしめ、再び道員に復することを得、中央に歸つて内閣侍讀學士となり、フランスに使光緒六年歸朝して三品卿に陞つた。」

と彼の官歴を細かに述べてゐる。もしこれにして信すべければ、彼は宗室ではなく漢軍の出であり、當時漢人の滿人に做つて二字の名を稱するものが多かつたのを、踏襲したものにすぎない。かくては德齡が「御香縹緲錄」で自己の祖先を清朝の太祖だとしてゐるのは眞赤な嘘だといふことになる。しかしこの記事に駐日公使に任じたことを云つてゐないのはどうしたことであらう。出身始末はなほ續けていふ、

「裕庚がフランスから歸つた時は、既に兩眼ともに盲ひてゐた。死因もそれによるのである。彼の妻は前に死して、一子奎齡といふ忘れ形見があつた。この妻の女中に鳳兒といふものがある。貧民の娘である。裕はこれを受し、また京師の妓を迎へて妾としたが、鳳兒が虐待したので服毒自殺した。官をやめて都に入つてからは一洋妓に會つた。これは父が西洋人、母が支那人の女で、上海育ちの者であつたが、裕庚はこれを受し、今度は鳳兒を棄てたので、鳳兒もまた自殺した。この洋妓はそれより裕庚の寵を専らにし、やがて後妻となり、前妻の子奎齡夫妻に母として臨んだ。奎齡はこれを憤慨して家出し、その妻が残つたが、洋妓はその衣服を奪つて女中代りとし、朝夕鞭打ち、裕庚もこれに加勢した。裕の隣家にイギリス人の宣教師がゐて

齡の境遇などに關しては、これ以外に正しい資料を知らないから、繁を厭はず載せて、諸賢の指示を待つこととする。

秦氏によれば、德齡は三年近く宮中にゐて、退出後、上海で米國の副領事 T. C. White に嫁し、共に米國に赴いた。ホワイトは歸國後、外交官を止めて新聞記者となり、その關係で德齡の文筆生活が始まつたやうである。しかも試みに出した、この「Two Years…」はその記事の内容の珍しさと清國のプリンセスといふふれこみとから、非常に賣れたので、次々に前述の如き著書が現はれたのである。また秦氏によれば德齡は民國二十五年（昭和十一年）に五十六才でなほ生存中であつたが、その四五年前にホワイトとは離婚し、しかもこの前の年ホワイトとの間にまうけた Thaddeus Raymond といふ一子を失つて

甚だ不幸な境遇にあつた由である。妹の容齡はこれに反し、唐寶潮將軍の妻となつて北京にあり、寫眞術を以て西太后を驚かせた兄助齡も生存して當時六十才、いづれも「御香縹緲錄」には序もしくは跋をのせてゐる。

かく當の御本人たちが最近では知らず、いづれもこのあひだまで北京にゐたり、支那へ往來したりしてゐるのであるから、以上のべた如き閥歴が不明などといふことは有り得

べきことでないのだが、事實は前述の如く滿人が漢人かといふ問題さへはつきりしないのである。但しこれらのことはさておいて此書は西太后の宮廷を最も親しく實見した少女の手記として、たゞに西太后の時代を知るのみならず、

前清の宮廷生活の概要を知るに最も便利な本と思ふ。二人の譯者自身、非常な興味を感じつゝ譯了したことを記しておく。

王雲五の「戰時中國文化の動向」

加。(六)演劇映畫の推薦。(七)書畫展覽會を催して兵火に遭つた地の救恤に充てる。

香港中國文化協進會では、四月六日、半年大會を舉行、會員來賓は文化人を網羅して盛大を極めた。主席陳炳權の開會の辭に續いて簡又文が工作概況を報告、陳其猷が賤務を報告、王雲五が「戰時中國文化の動向」と題して講演を行つた。簡又文は次の如く會の工作を報告した。

- (一)「文化界」「大風」「文化通訊」「廣東風物」の出版、および「文化小叢書」「廣東叢書」の編輯。
- (二)巡迴講演會、文化講座の開設。
- (三)藝術觀賞會、圖書共進、文化座談會。
- (四)國語班を開設して國語運動を推進。
- (五)社會運動に參

加。(六)演劇映畫の推薦。(七)書畫展覽會を催して兵火に遭つた地の救恤に充てる。王雲五の講演は三段に分つて述べられた。先づ(一)教育方面については、重慶方面各地の學生生活を描き、特に農村教育を取り入れることによつて中國の環境に適合するであらうとし、從來の外國留學生が歸國してもその學んだものが中國に適用できなかったことを回顧して、かくの如き教育は國民を殺すに等しいと痛歎した。(二)學術研究方面に關しては、戰前の各學術研究は主として注意を世界學術に向けてゐたが、戦後は地理上と環境上の刺戟によつて學者は祖國の歴史に關心をもつてきてゐる。

香港の學者は、北方の學風の影響を受けて以前よりも活潑な業績を擧げてゐる、と言ひ、(三)出版方面については、以前は上海が出版の中心であつたがそれが戦後は西南に移り、西南各地の作者は出版が便利になつた。香港も同様であるが、たゞ香港では參考圖書を見たいと思つても非常に困難である。これは香港の藏書家が他省と較べて少いのは決してなく、圖書目錄の無いことが原因なのである。と述べて、中國文化協進會がひろく大小圖書館・藏書家と連絡して圖書目錄を編輯し、學者の資料參考に供してもらひたいと希望して講演を終つた。なほ此の講演は王雲五が先に重慶に於ける

日本文化紹介の大圖書館

大隈新報によれば、國民政府内政部長陳群氏は、眞の日支提携のために中國人に日本の偽らざる姿を知らしめなければならぬことを痛感、日本文化紹介の大圖書館設立を計劃中であるが、既に南京市内に敷地を選定、八月までには竣工を見る筈である。同圖書館には日本各界の代表的書籍五十萬冊を揃へる豫定であるといはれ、完成の曉には日支相互の文化界に大きな成果を齎すものであらうと期待されてゐる。

山西開發發展を觀る

入口は炭坑の中へ入るやうに黒い石炭の壁にかこまれてゐる。明るいデパートの近代的な風景から、急にその暗い入口に入ると、まづ突然山西省へ來たやうな気分になる。支那人工夫の人形がトロッキを押してゐるのが最初に眼につく。その顔はどうも日本人としか見えぬが、服も靴も支那のものである。これで、ともかく山西省には石炭がうんと出ることゝ、そこで支那人が働いてゐることがわかる。

あたりに貼られた山岳や高原の寫眞、古い實物の塔など見てゐるうちに、身も山西の奥に在る気分になるが、その時ヒョイと右手を見ると、オヤと思ふ。そこには山西省の歴史的人物が美しいパノラマになつて並んでゐる。大帝舜が王朝時代の公卿のやうに、侍臣をひかえさせて、しづかに洪水をながめてゐる。青い水が田畠にみちてゐるが、大帝舜は水邊の自然を楽しむごとく端然と坐つてゐる。橋のたもとに豫讓がまちかまへてゐる。仇敵は石の橋を渡つて近づいて來るらしいが、まだその車は姿をあらはさない。韓信

は無頼の少年にとりかこまれ、地に伏して股をくゞつてゐる。赤茶けた丘の上に股くぐりが行はれてゐる。

關羽の馬は前足を高々とかゞけて、城門の前で武者ぶるひしてゐる。城門の金具が燦然として光つてゐる。楊貴妃は玄宗とともに歡樂きはまつたこの世の終りに近づいてゐる。

このやうな美しい歴史的光景が華やかな装置で並んでゐて、それは芝居の舞臺を見るやうである。人々は芝居の看板を見るやうに物珍しげに見入つてゐる。人工の光りの中で、どの人物も綺麗に浮きあがつてゐる。

次に山西博物館と云ふのに入る。そこには古い碑の拓本や、山西で印刷された木版本、黄色い佛の首、五色の墨で黒い紙にかいた西蔵文字の經、陶器の枕、などが陳列してゐる。その様々な色や形がガラス窓の中に並んでゐて、博物館らしい古い空氣、整理された古い文化の空氣があたりを漂つてゐる。もう過ぎ去つてしまつたもの、すでに亡びてしまつたもの、その斷片が集められてゐる。それは大部分、支那學に關係深いものではあらう。しかし現代人は只ボンヤリとその傍を通り過ぎてしまふ。博物

館には歴史的パノラマのやうな華なもの、迫つて來るものがない。そして見物人は支那學の前を呑氣に歩み去つてしまふ。物語的興味もなく、只古いと云ふことだけでは見物人は足をとめない。私は何となくわびしい心を抱いて次の部分へ行く。

そこには産物が集めてゐる。生活に必要な物、人間のほしがる物が澤山陳列してゐる。山西省の明礬、山西省の石膏、山西省の鐵鑽石。重みのある堅い只の鐵物にすぎないが、見物人はなつかしさうにそれにさへはつて見る。この鐵物の中から彼等の繁榮と幸福が生れて來るからであらうか。人々にとつては鐵物までが生き生きとして呼びかけて來るやうに思へるのであらう。暖かさうな羊毛と棉花。白い綿布とタオル。油でよごれた麻の袋はたのもしくふくらんでゐる。本物の牛の匂ひのする大きな皮はなんと丈夫さうに見えることよ。人々はかう思つて眼を輝かしてゐるのだらう。資源と云ふこと、生産と云ふこと、建設と云ふこと、國策と云ふこと、つまり生活のことが人々の胸をつきあげてくるのであらう。正面に、大きなパノラマで、土民の穴居生活の有様ができてゐる。老母が一人抗の上に坐つてゐる。黄土の部屋の中には、ま

も魯迅の事を想ひ出した。忘れてゐた魯迅と云ふ凄い奴を想ひ出させられた。そしてゾツとして後をふりかへつて見た。何か僕の圖々しい心根をグサリとつき刺し、面の皮をへぎとつたやうな気がした。魯迅がこんな苦しみでゐたのと思ふと、自分まで何處か苦しくなつてきた。墨で書かれた説話は断じて血で書かれた事實を瞞着することは出来ない」と云ふ言葉が序章に引用してあつた。それを見ただけでも、もう少し氣持が悪くなつた。第六章「彷徨」には、小説「孤獨者」の中から次のやうな言葉が引用してある。「彼は不似合な衣冠につつまれて、靜かに横はつてゐた。眼をつぶり、口を閉ぢ、口もとにさながら氷のやうに冷い微笑を浮べて」

第十二章まで讀み終るうちには、この魯

迅と云ふ人間の住んでゐた「支那」と云ふものが、次第に巨大な影のやうにたちだかつて来て、瓦斯のやうに口鼻をおほひ、やがて重量をまして全身を壓しつけて来るのをおぼえた。そしてその重量は、僕等の上にくだされた宿命的な重量のやうな氣がした。一生のがれられない重量なのであらう。小田さんがいつのまにか魯迅傳を書いたのが宿命だとすれば、魯迅を想ひ出させられて「支那」の重量を感じるのには、僕等の宿命かもしれない。

「長安の春」

石田幹之助氏の近著である。内容は同名の「長安の春」以下、全部で七篇の文章が収録されてゐる。すべて著者が昭和三年から昭和十一年までに發表したもの、出版にあつて筆を加へた由、後記に断つてある。この著者が、このやうな文章を書いてゐたのを、うかつにも僕は知らなかつた。今さら一讀して驚嘆を感じてゐる。見事な

ものである。僕は専門的なこと（それは主に考證を云ふ歴史學の立場を指すのであるが）には門外漢だから觸れないが、そして、素人から見ても、周到な考證の質量は十分感得されるのであるが、何よりも僕を驚かせたのは、さうした考證を素材のまゝ投げ出すのでなくて、また、さうした素材を何か事ありげな法則の抽象に利用するのでなくて、著者のもつてゐる歴史のイメージに融合させた豊富な文學的感性のゆゑである。僕は「長安の春」が一番面白かつた。

魅力のある書名の廣告を新聞で見たとときの杞憂は、一讀して消えた。そこには、ねつとりした長安の春の空氣が、嚴しい考證の隙間からにじみ出してゐるのである。李白や杜甫が、前景の人物として點綴されてもをかしくないほど、この舞臺裝置は巧である。これは、庶民の生活を許さない著者だけの世界かもしれない。そんなことは問題でない。必要なのは歴史のイメージを再現したといふこと、それが、イメージをもたぬ歴史家たちと共に、不拘束な觀念だけで歴史を處理しがちな僕らにも、ある可能の型の一つを考へさせるのである。（竹内）

菊二三頁、二圓三十錢、創元社

後記

ちかごろ各地方の未知の方々から激勵のお手紙を頂戴することが多くなつた。なかには、現地に居て貴重な資料を送つて下さる方もあり、御厚意に感謝のほかない。さういふ人々の心のこもつた善意に守られてこの冊子はますますよくなるだらう。

われらは新しい力を生まねばならないのである。現在の老衰文化を信じてはならない。すべては、よき世代のためである。お手紙にはつとめて御返事するやうにしてゐるが、多忙にまぎれて心ならずも遷延することも少くない。自ら做るつもりは毛頭ない。どうか御承願ひ度く、誌上を借りて御禮を申述べる。

本號は倉石氏の著書を問題として取上げた。多方面の人に意見をきくつもりであつたが結果は貧弱になつた。今後この討論は續けたいと思ふ。（竹内）

「ちかごろでは本屋の店頭では比較的酷遇されてゐるやうなあまり有名でない薄べらな雑誌の方に、讀みごたへのある文章が多いのである。これはなんとなく心の勇む事實である。」

新文化の六月號で淺野堯氏がかう言つてゐる。僕らの雑誌は、薄べらではあるが、あまり有名でない、どこるではない、知つてくれるべき人の間では既に有名であるし、讀みごたへのある文章が多いかどうか、これは編輯圈外の人々の批判に屬する。ともかくも僕らは當面の問題として紙の適正な配給を望みたい。愚にもつかぬ論說記事で充満したいはゆる綜合雑誌が毎月々々貴重な物資を浪費して行くのは、全く心の暗くなる事實である。

各方面からさまざまの反響が聞かれて、うれしい。いつぼんの笛の音はよし細くとも、この笛の音のこだまするところ、日本と中國との運命の新しい芽の

増はれつゝあることを確信しよう。（齋藤）

執筆者紹介。永嶋榮一郎氏は北京留學五年、日本語教授に盡力されて最近歸朝、現在は東亞學校勤務。竹内照夫氏は、熊本五高の教授。田中克己氏は、コギト、四季の詩人。東洋史。蒙古研究所勤務。

正誤表(一)

頁	段	行	正文
二五	上	三	愆打那兒來
三三	下	二〇	小林好日
四四	下	五	たわ言
五九	上	三	ざわざ
六一	下	一	くびくもの
八六	上	八	辯解
〃	〃	〃	〃
〃	下	三	粉碎
八八	下	一	記憶があ
九三	中	五	く。
〃	〃	〃	みた。

中國文學第七十三號

昭和十六年五月廿八日印刷納本
昭和十六年六月一日發行

編輯人 竹内好
編輯所 東京市目黒區上目黒五ノ二四六八
電話澁谷(46)二一三番
振替東京八三一五〇番
印刷所 株式會社開明堂
東京市神田區鍛冶町三ノ六
發行兼印刷人 鐵村大二
東京市神田區鍛冶町三ノ六

發行所 生活活社
電話神田(25)二七七九番
振替東京四三三〇一番

定價 一部 二十五錢(送料一錢)
半年 一圓五十錢(送料共)
一年 三圓(送料共)

◇中國文學研究會は中國文學の研究と日支文化の交驛を目的とする研究團體であります。何人も會費年額三圓前納することにより會員たり得ます。會員は本誌の配布を受けられるほか種々の便宜を與へられます。
◇編輯と惠贈に關してはすべて編輯所宛に願ひます。
◇會務、販賣、廣告に關してはすべて發行所宛に願ひます。

中國文學第七十三號

昭和十一年八月五日第三種郵便物認可
昭和十六年五月廿八日印刷納本(每月一回一日發行)

昭和十六年六月一日發行



Ⓢ 頒價二十五錢